

Lofty aspiration with colleagues toward new era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36429

志と継承

Lofty aspiration with colleagues toward new era

金沢大学医薬保健研究域医学系血液情報統御学
(臨床検査医学)

和田 隆 志

人がなんらかの行動をする際には動機や原動力があろう。それはいったい何なのか？これは個人差もあり社会、時代背景も関連する問題である。それゆえ多く答えがあると思う。過日、ノーベル化学賞を受賞された下村修先生の「私の履歴書」の中の文章を読んだ。ノーベル賞受賞につながった研究成果は偶然から生じ、それを必然にかえたこと、そして実験がようやく成功し興奮して眠れなかったことなどが記載されていた。そこでは瑞々しい純粋な知的好奇心がいかに人の気持ちを前向きに動かすか、ということを私なりに再認識することができた。もちろん、これほど立派な研究の足下にも遠く及ばないが、私自身も偶然の小さな、小さな幸福から面白いデータがでて、わくわくどきどきして夜も眠れない思いをしたことが幸いにもある。あれこれ今後の研究やそこから派生する臨床応用など考えている時間を味わえていることが財産だと思う。この小さな幸福をもういちど味わってみたい、同僚・後輩たちと共有したいという思いが強い。このとても単純な「面白い」「わくわくする」という思いこそ細々ながらこれまで仕事を続けてこられた原動力になったように思う。

人材に相当する英語としてhuman resourceとともに、human capitalが使用されるようになって久しい。つまり、人は重要な資本となる、まさに宝であるということであろう。人材は“人財”ともいべき変化であろうか。それではその人材(財)をいかに育むか、瑞々しい知的好奇心とともにたてた志をいかに自ら鍛錬し、それに共鳴・共感できるチームを作るか。そしてそれを継承しバトンタッチをしていくかはいつの時代でも大きな課題であると考え。これまで、私自身も多くの偉大な先輩方や同僚、後輩たちから鼓舞されてきた。大変恵まれていたとありがたく思っている。これまでに優れた指導者、同僚あるいは医師、研究者達の志に触れ、名講義や思いのこもった講演にも高揚してきた。人は人から直接、あるいは間接的に学ぶ点がいかに多いかということも実感している。城内キャンパスに憧れて入学した母校で講座を担当させていただくようになって丸6年が経過し、残りの任期が14年余ある。起承転結の「起」が終わり、「承」に移行している時期である。優れた先達の教えをいっそう学び、身につけていくと同時に、後輩たちと瑞々しい好奇心を共有し、志のバトンをつなぎ、どの様に社会貢献をはたすか、思いを巡らせている。

そのヒントになる歴史上の人物やエピソードは多く存在すると思う。このうちの一人が吉田松陰であろう。文政13年(天保元年、1830年)に長門国萩松本村(現山口県萩市)で生まれた吉田松陰は、「身はたとえ武蔵の野辺に朽ちぬともとどめおかまし大和魂」と書き出された

留魂録を残して安政6年(1859年)に刑死、享年30歳の短い一生を閉じている。この短い一生のうち、ほんの数人というさらに短い期間、松下村塾という私塾において、塾生たちに講義をしている。吉田松陰は一生を通じて将来を担う人材(財)育成に情熱を持ち続けた。その志が伝播された数多くの指導者がその後活躍することはよく知られたことである。この点でも吉田松陰の強い思いは見事に引き継がれている。吉田松陰が講義をしていた松下村塾は山口県萩市に今も保存されており、本年夏に再び訪れる機会があった。思いのほか小さな建物である。この中で一体どのような熱のこもった講義や議論がされていたのか、そんなとりとめのない事を考えてしばらくの間見入っていた。

「最近、好奇心をもって、わくわくどきどきして取り組んでいるものがありますか。」この質問を医学類学生に講義、BSL、クリニカルクラークシップなどで聞いてみるのがよくある。本年は機会を頂いてMRT(medical research training)プログラムでも講義をさせていただいた。そこに参加している大学に入学したばかりの学生にも聞いてみた。また、本年8月に開催されたオープンキャンパスでは模擬講義をさせていただき、その途中で高校生にも聞いてみた。若く希望に満ちた学生たちである。衆人環視のもと面映いこともあろうが、いろいろな答えがもどってきて興味深い。

平成24年(2012年)、金沢大学医学部では創立百五十周年記念式典と記念事業が行われた。私も微力ながら記念誌編集委員として、編集に携わる機会を与えて頂いた。携わった皆様の使命と熱意に敬意を表するとともに、多くのことを学ばせて頂き感謝している。このなかで自身の教室史にくわえ、通史のうち戦後のあゆみを担当させて頂いた。ここでもまた、瑞々しい知的好奇心とともに高い志をもった人材(財)が生まれ、綿々と紡がれていく有様に触れることになった。目前の我々の小さな取組はこの瞬間から歴史となる。後世につながり、質が高く患者の福音となる仕事への思いを強くせざるを得ない。さらに、通史の最終章は「未来へ」という将来志向の構成になっている。この150年の潮流をさらに発展させ、自分自身の研鑽はもとより、人材(財)が羽ばたけるソフト、ハード両面の変遷、本学で学んだ人々が日本、世界で活躍することに期待をかけて記載した。

志とは百人百様で可視化や定義付けも難しい。そこに至る過程や、具現化する原動力も人それぞれである。この中で「面白い」と思って仕事をし、「わくわくする」気持ちを共有する人材(財)とともに少しでも本学、医学、医療に貢献できればと思っている。